

# 糸山河

## 第五號

平成4年7月1日

発行

社団法人 沼津牧水会

### 目次

牧水とふるさと	2
東郷町牧水祭・	
牧水公園除幕式	5
牧水片々(その1)	6
沼津牧水会の足跡④	8
牧水の魅力と	
現代に於ける意義	12
サロン音楽の夕べ	13
第38回牧水祭・碑前祭	14
短歌大会	15
雛の歌会	16
平成3年度事業報告	17
定款・後記	18

# 牧水とふるさと



## 渡邊 邦彦

私が県立延岡中学校第四〇回生として入学したのは、戦時中の昭和一三年四月で、同校第一回入学生である牧水は、すでに一〇年前に故人となっておられた。しかし、大先輩牧水の偉業は、われわれ生徒の間でも折りふれ話題となっていたし、また誇りともしていた。

雲ふたつ合はむとしてはまた遠く  
分れて消えぬ春の青ぞら

私が初めて牧水の歌に出会ったのは、同校図書館に備えてあった『牧水全集 改造社 昭和五年五月発行』で、右の歌に特に共感を覚えたのである。そして、放課後など運動場の芝生に寝ころび、ひとり、この歌を口ずさんで青春の哀歓をかみしめたものである。

ところで、牧水の中学時代のエピソードとして、ある古老（故人）から聞いた話だが、中学二年生の頃、ある期末試験の数学（幾何）の問題で、時間切れ間際、牧水は何を思ったか解答を全部消してしまい提出した。早速、数学の教師から職員室に召喚され、こっぴどく説教された。その時、山崎校長（初代校長）が職員室前の廊下を通りかかり、見ると若山繁が怒鳴られている。校長はすでに牧水の文才を認めており、寵愛していたらしい。「どうした？」「校長さん、これを見てください。裏を見てください。」答案用紙を手にとった校長はくすくすと笑い出した。「世の中は△、□じゃ渡られぬ」とかく〇くて 事はおさまる」

とあった。「こりゃあ、よく出来とる、まあ、いいじゃないか」と校長は数学教師をなだめ、一件落着という次第。

延岡から、故郷東郷村（現在東郷町）坪谷までは約四〇キロメートルある。休日など帰省するには、おそらく、山陰（東郷町の中心地）まで、馬車に乗り、そこからは坪谷の生家まで（約八キロメートル）歩いたと推察される。村の古老の話では「かすりの着物を着た牧水さんが、本を読みながら歩いて帰るのをよく見た。」と言う。読書、とくに小説を好んで読んでいたらしく、近所の子ども達は牧水さんから、『むかしばなし』を聞くのが楽しみだったとも言う。

生家の裏には、今なお、『唐臼』が当時のまま保存されているが、医師であった父立蔵が往診の代金の代わりにもらってくる『粃米』を家族はここで踏んでいたように、牧水も、よくその手伝いをしていたということである。牧水の幼少時代、母マキの躰はかなりきびしかったようである。小学生の頃、生家の前を流れる坪谷川で村の子ども達とよく泳いだ。川に入る時、他の子ども達は着衣をぬぎすてて川に入っていたが、牧水は着衣を丹念にたたみ、その上に小石をのせていたということで、母の躰の一端がうかがえるのである。

ところで、私ごとになるが、延岡中学を卒業した私は教師を志し宮崎師範学校に進み（三年生の夏、海軍に入隊したが、間もなく終戦）、昭和二〇年一〇月、幸いにも牧水の母校坪谷小学校に赴任することとなった。私の下宿と学校との間に牧水生家があり、私は朝夕生家の前を徒歩で通勤していた。その頃、生家には、色の白い上品なおばあさんが独り住んでおられた。牧水のすぐ上の姉のシツさんである。私は時々シツさんに用事を頼まれた。というのは、生家の井戸は屋外にある（現在も保存）。からだが不自由なシツさんには、井戸水を汲み、台所の水がめに入れるのは難作業であった。私の手伝いは、その水汲みの仕事であった。その御礼として、シツさんはお茶とかき餅を私にご馳走してくださった。私はそれがまた楽しみでもあった。

話は変わるが、昭和二二年四月、全国に新制中学校が創設され、私は坪谷中学校の教諭となった。昭和二五年のある日のこと、昌福寺（坪谷）の住職山本源宗氏がやって来られた。「生家の前の標柱がかなり古くなり、いたみもはげしいので新しいのに作りかえたい。木材を運ばせるので、文字を書いてほしい」と言うのである。私は書は自信がないからと断ったが、是非と言うので引き受けることにな



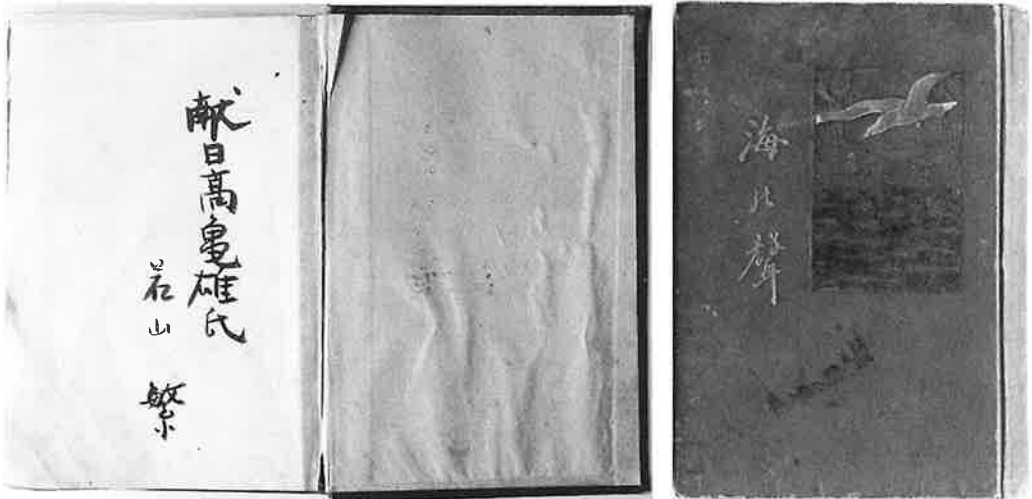
牧水のふるさと 生家(上)と近くの牧水公園



った。そして住職は言う。現在の『歌聖若山牧水之生家』とあるが、この『歌聖』をどう思うか、と言うのである。

有志の間でも、この際、『歌人若山牧水』としたらどうかと言う意見もあるとのこと。「やはり、牧水の場合は、歌人牧水がいいと思う」と私も答えた。数日間、習字の練習をした私は、ま新しい標柱に「歌人若山牧水之生家」と書き、後日、青年たちによって生家の前に建てられた次第である。

再び私ごとで恐縮であるが、私は村の坪谷神社（日高家）の長女を妻にすることになった。妻の話によると日高家と若山家とは祖父（日高亀雄）の時代から親交が深く、それが父（日高郡司）の時代も続き、家に珍しいものや、団子などが出来ると、妻は若山家のシヅばあさんにそれを持って使いに行っていたそうである。シヅさんは、「お前」のことを「おめえ、おめえ」と言っておられたとも言う。牧水の早稲田時代も、日高家は何がしかの支援もしていたらしいと聞く。牧水もこのことは知っていたのであろうか、牧水が処女歌集『海の声』を出版した時、日高家に一冊贈っており、そのとびらに、『献日高亀雄氏 若山 繁』と自署してあり、今も日高家では宝物としている。



牧水が久しぶりに帰郷すると、幼な友達が相集い、酒宴が毎晩のように続いたらしい。亡父の二三回忌には、長男旅人さんを連れて帰省したが、生家の隣りに矢野寅吉という爺がいた。牧水が幼少の頃から「しげ坊、しげ坊」と可愛がった人である。二人は互いに盃を交したが、その時、次の短冊を「寅おぢやん」に贈った。

お隣りの寅おぢやんに物申す  
永く永く生きて お酒飲みませうよ

短冊の裏には「矢野寅吉おぢやんに贈る歌おとなりの若山のしげ坊」と書いている。

また、親友の那須九市氏（坪谷郵便局長）が、「孝行の歌を書いてくれ」と頼んだところ、牧水は「僕は不幸の子だから孝行の歌は出来ないよ」と断ったが、是非と頼まれて、「老いゆきて帰らぬものを」の歌を書いて与えたということである。

さて、昭和三年、四十三年の生涯を終えたが、その翌年、母マキが死去、母の希望で牧水の分骨は母の胸に抱かれて、父母、祖父母のねむる坪谷の墓地に永い眠りをつづけている。

○宮崎県東郷町教育長

○東郷町若山牧水顕彰会事務局長

# 宮崎県東郷町牧水祭・ 牧水公園牧水銅像除幕式

平成3年9月17日(火) 午前9時30分

〈参列者〉 杉田克己（沼津市教育長） 佐野敏夫（沼津市社会教育課長）  
林 茂樹（沼津牧水会理事長）



牧水銅像除幕



牧水銅像除幕式参列者



林理事長による牧水歌碑への献酒



沼津市教育長(右)と社会教育課長



牧水公園内、牧水銅像（後方左は東郷町牧水記念館）

# 牧水片々（その一）

若山旅人



父・牧水と私との間のことを申し上げるとなると、お互いが人間として生きお互いを確認し合った歳月から云っても僅か十五年という短い歴史が残っているばかりだから、普通に云う父と息子の常識的な姿は無かったと云ってよいような気がする。死別の時に私が十五歳の中学三年生だった事から云っても、父と子として世間の事も暮し向きの事もそんな話題は一つとしてお互いの間に生れる様な事は無かった。本来ならばそれから後の十年が、お互いの人生として最も緊要な歳月だった筈なのに残念な気がするのである。

そんな訳で私にとって牧水の事は、繰返しくり返し思い起す事で成長した様なものなので、神の思召しだろうかとはびぬけて早くから父の印象を私の中に定着出来た幸運を感じている次第で、ありがたい事に思っている。

私が牧水を父として頭に刻み込んだ最初の記憶は、私が生れて一年十ヶ月余りの日の事だった。それ以前の事はどうあがいても私の頭にもものかたちとして浮び上って来ない。

そのかたちというものが何だったかと云うとそれは一本のおもちゃの刀だった。竹光と云って竹篋たけかぶに銀紙を貼ったもので、赤い鞆たもとがついている安価な玩具。その軽くて赤い鞆が風に舞って私から離れて行くではないか。私は「アレー」と言つて悲しんでいる。その泣かん許りの私の背後から腕で支えていたのが父だったのである。その時の父が、私の人生の最初に現われた「人」であつた。

父は、母と私を連れて一家三人で、東京から三浦半島の漁村に移転する事になり、その日品川から汽車に乗った次第だった。疾走する汽車の窓にのり出して右手が振つていたその刀からスルリと紙の様に軽い鞆がぬけ去つた。そしてそれはヒラヒラと列車の風に煽られて線路脇の草の葉の中に消えてしまつた。某処迄がまるで昨日の事の様に鮮やかだ。以上がやがて八十年になろうとする私の生涯記憶の発端である。こういう残念で悲しい印象から私の生涯が展開していると思う事も一つの人生だろうか。大正四年の三月だった。

処でこの日の、車中の牧水の記憶に引き続いて、次に現われて定着した十二ヶ月後の牧水の姿はもう生涯消えぬものとなつた。

朝早く、日はまだ登らず一帯が霧めいてしめつてゐる。私は母に手を引かれて浜べに立っている。すると渚続きを遙かに牧水が歩いて来る。東京から金を懐中にして来るのだった。前夜芝浦棧橋から便船に乗り翌未明に浦賀に着くのである。日中ならこの村迄馬車もあるのに牧水の心は朝駈けで峠を二つ越えて八キロの道を急ぐのだった。喜志子もそれを待つて、起きぬけの顔も洗わぬ私をかかえて浜べで待つたのだった。いつもの傘を杖にした尻端折り下駄ばきの姿。そのパツチの白い動きが目に浮ぶ。私は抱かれに砂の上を走つて行く。初めての父と子の象徴的な記憶である。私が満二歳となる大正四年五月の朝で、もう前後の脈絡も確かな思い出となる。

# 沼津牧水会の足跡④

連載四回の今号は第二十三回の牧水祭の記録から始まる。一九七六年（昭和五十一年）のことである。この年、第三十四回総選挙実施、自民党敗退。ロッキード事件発覚、田中元首相逮捕。新自由クラブ結成。毛沢東が死去と激動の年であった。社民連の結成は一九七八年。この年西武ライオンズ発足。江川の巨人入団問題でもめたのもこの年である。大岡信氏の「折々の歌」の連載が始まったのも忘れ難い。牧水会の活動はそんな世相の動きの中で営々と続けられて来た。文化の小さな灯を点し続けるといった悲壮なものではなく会があり、集まってくる者がいるからやるといった恣意的な活動は、苦勞を楽しみとしてしまう不思議な雰囲気を持っていた。

## 第二十三回 牧水祭

昭和五十一年

○碑前祭 十月十七日（日） 正午

牧水会会長・井手市長・真野芳雄市議会議長・

鈴木孝教育長を迎え、盛大に行われた。

献酒・若山旅人氏

献花・須田かおりさん（少女）

朗詠・大悟法利雄氏

沼津合唱団の合唱

式後、アトラクションとして、沼津太鼓、詩吟・

愛吟国風会、沼津民謡の会及び須田社中による

民謡踊りがくりひろげられ、恒例の芝酒盛・お

でん・干物が振る舞われた。

参加者約百名。

○短歌大会 十月三日（日） 正午より

会場 市文化会館

詠草 二百十六首（出詠料五〇〇円）

参加者 百八十名

講師 木俣 修先生。

演題 「文学と人生」

県歌人協会会長の高原 博氏を迎えてなごやか

に厳しい歌会であった。

総合同会 須永秀生

歌会司会 岡本淳子 川口和子

入選作品

牧水賞（木俣 修選第一位）

我儘を打ちつけあひて過すわれら別れのときの  
いつかあらむに  
砂山 コウ

市長賞（互選一位）

夫は逝き子も去るといふこの店になおも生きた  
し朝の水うつ  
塩谷千鶴子

市議会議長賞（互選二位）

言ふまじく見まじき術も年ごとに巧みとなりて  
老重ねゆく  
鈴木 益枝

教育長賞

輝やきの日などなかりき裏畑の枝豆夫と日がな  
摘みおり  
杉山 良恵

沼津朝日賞

停止せしその瞬間の角度ならん冬の列車のむき  
むきの扇風機  
原 悦子

山脈賞

信じ合い金婚というに夫の瘧だまさねばならぬ  
ことさえかなし  
後藤富士子

東海短歌賞

防潮堤の斜面競いてかけ登る子らの息づき七月  
の海  
杉山 杏子

木俣 修選二位以下の作品

荒き潮にころろを満せし日々のこと今宵しずま  
る闇に思えり  
秋山美智子

きりぎしの石仏が向く沖の海うねり明るく秋陽  
は満てり  
新井 愛子

死にちかき父がみかんの出来のこと母に問える  
をかたわらに聞く  
芹沢 君代

鱗粉のごとくまばゆき海にきて君に告ぐべき言  
葉葬りぬ  
前田 稔

エロイカの重き調べに少年の眼差し燃ゆる八月



の森

斎藤 俊夫

雑草の中のカンナを刈り伏せて唐突に思う生き  
死にのこのこと 川口 一磨

輝やきの日などなかりき裏畑の枝豆夫と日がな  
摘みおり 杉山 良恵

こころ冷えて流離の果ての窓に寄り吹く秋  
の夜のハモニカ 石川 節子

夕光に高く揺れいるクレーンの長き影踏み人帰  
りゆく 勝間田美佐雄

○大悟法利雄氏を迎えて

「牧水の思い出」を聞く会

十一月 大手町会館 五十余名出席

第二十四回 牧水祭

昭和五十二年

○短歌大会 九月二十五日(日)

午前十時三十分より午後四時

会場 文化会館大ホール 出詠料五〇〇円

詠草一九一首 参加者一四〇名

特別選者 田谷 鋭氏(コスモス所属)

田谷氏選一位を牧水賞、市長賞以下の各賞は

先年同様互選によって決められた。

司会 川口 一磨

入賞作品

牧水賞

許されぬ愛つらぬきて住みし街よ戸越銀座の灯  
こいしき 秋山 鈴子

市長賞

夏足袋のこはぜかつきり留めて立つそのときす  
でに人に会う貌 芹沢 君代

教育長賞

この櫂の下闇なりき征き前の夜を始めて呼び出  
だされし 田代 貞子

市議会議長賞  
あらたなる別れの如き思ひして送り火のそばに  
ながくかがまる 砂山 コウ

沼津朝日賞  
辺境に昆布を採りいてだ捕さるる漁民を思う鮭  
を焼きつつ 芹沢 初子

マルサン賞  
亡き母に告げ得ぬ一つ悔いありて魂祭りの夜小  
さく座る 杉山 良恵

東海短歌賞  
移り住みて竹の若葉のおう辺にあかあかとあ  
なたの迎え火を焚く 塩谷千鶴子

山脈賞  
躡の砂利こそげ退く遠州灘の濤の響動みよふる  
さとにいま 杉山 杏子

田谷氏選二位以下の作品の作者名  
②新井愛子 ③天田まさよ ④渡辺まつ

⑤岩柳はな ⑥植松さみ江 ⑦前田百合子

⑧増田さだ子 ⑨岩崎八重子 ⑩高木三枝子

○碑前祭 十月六日(日) 午前十一時

夜来の雨が上がり、絶好の祭日和、三百名の参  
加で盛り上がる。

献酒・鈴木秋汀氏。若山旅人氏は夫人の病のた  
め欠席。

少女の手による献花。

短歌朗詠・大悟法利雄氏

井手市長・議長・教育長の挨拶

沼津合唱団の合唱「しらたまの」ほか。

沼津太鼓・民謡踊り・岳心流短歌朗詠など多彩  
な催しのあと、地酒「牧水」に添えて名物の干  
物・おでんと野趣一杯の芝酒盛が三時まで続い  
た。なお、この年は転氏の好意により甘酒茶屋  
も設けられ茶店に腰かけてすする甘酒は殊のほ  
か美味であった。また若い外国人夫妻の楽しげ  
な参加もあり、牧水祭の広がりを思わせてほ  
えましかった。

○没後五十年・若山牧水展

九月十五日二十日  
富士急百貨店六階催事場

沼津牧水会・沼津史談会・沼津市教育委員会主  
催

展示品  
半切五十点・短冊三十点・色紙十一点・書簡十五  
点・原稿二点、他に扇面・徳利・盃・菓子鉢・  
鉄瓶・牧水旅装のパネル・銅製立像(堤達男氏  
作)など、沼津市及び周辺の諸氏に協力を求め、  
愛蔵品をお借りして展示。なお、杉山賢二氏所





蔵の牧水著作の初刊本や歌詩「創作」等の書簡も展示場の一隅の本棚に配置され、手にとつて見る事もできた。展示会は好評で連日多数の参観者を得て成功裡に終わる。

## 第二十五回 牧水祭 五十年祭

○短歌大会 一九七八年（昭和五十三年）  
十月一日午前十時三十分より午後四時  
会場 沼津市金岡会館（太陽の家）  
詠草二・三九首 出席百八十名  
出詠料五〇〇円

特別選者・講師 近藤芳美氏（未来主宰）  
入賞作品

近藤氏第一位を牧水賞、市長賞以下の各賞は  
互選高点順に決める。

牧水賞

ひだ多き夫のところに触れいしや手ずれの聖書  
声ある如し 木村 竹代

市長賞

いつの日か病めば都会の子の許に寄りゆく身な  
り荒草を刈る 伊藤百合子

市議会議長賞

确实に今日を生きしという思い抱きて厚き帳簿  
を閉じる 三須 好子

教育長賞

睡るともなく覚むるともなき白き部屋の一日を  
区切る配膳車の音 杉山 杏子

沼津朝日賞

落日がたとへやうなく華麗ゆゑい少し君の嘘  
を聞きあむ 三浦 征江

マルサン賞

いくばくの脱皮はありや一夏をアルバイトせし  
息子の作業衣洗う 鈴木まさ子

山脈賞

亡き妻よ子よ満州よ空っぽの墓に来て佇つ独り  
対き佇つ 菅沼 高嶋

東海短歌賞

言ひたきを耐へしばかりに寝ねがたく更くるに  
冴ゆるこの雨の音 鈴木 益枝

近藤芳美氏選二位以下の作者

- ② 菅沼高嶋 ③ 吉沢まつ ④ 室伏 侑
- ⑤ 佐野つる ⑥ 河辺草路 ⑦ 杉山杏子

⑧ 長藤幸治 ⑨ 寺田桂子 ⑩ 宮 未知

○碑前祭 十月八日 午前十一時

献酒・献花 若山旅人氏  
牧水調短歌朗詠 大悟法利雄氏  
挨拶 若山旅人氏

庄司沼津市長

沼津合唱団の「幾山河」他の合唱  
沼津太鼓・沼津民謡会とグループ栄の踊り

愛吟国風会・岳心流・聖心流の短歌朗詠など多  
彩にくりひろげられ、名物のおでん・干物によ  
る地酒「牧水」の芝酒盛・甘酒茶店の開店と、

暑くもなく寒くもない絶好の日和に芝生の上は  
三時過ぎまで歓談の花が咲いていた。

## 第二十六回 牧水祭 昭和五十四年

○短歌大会 九月三十日（日）午前十時半  
会場 沼津市金岡会館（太陽の家）  
出詠料五〇〇円

詠草数二六三首 出席者 一六四名

特別選者・講師 大西民子氏（形成）  
入賞作品

牧水賞（選者第一位作品）

亡き父の使いし鉢のバネ強し早生のみかんを母  
と摘りゆく 芹沢 君代

市長賞（互選第一位）

「這つても必ず還る」と言ひたきり這ひてい  
づくに行きたる夫か 吉永 百世

市議会議長賞（互選第二位）  
別れて夕べの階をくだるとき非情にわれを晒

す灯のあり

商工会議所会頭賞（選者選第二位）

わが家のぬか床が欲しいと言う嫁に分ちしことが  
こんな嬉し  
観光協会会長賞（選者選第三位）  
シドニーなる子が寄りて佇つ樹の蔭の緑ひろご  
る写真届きぬ  
小笠原和子

教育長賞（互選第三位）

売上げのやや多き日を夜の街にうなぎ飯食ふ妻  
を誘ひて  
佃 春夫

東海短歌賞（互選第四位）

とげひそむ言葉にわれは危うくも耐えて鈍感を  
装いいたり  
遠藤あい子

山脈賞（互選第五位）

亡き父の使いし鉄……  
沼津朝日賞（互選第六位）  
ひたすらに酔えば歌ひぬ数々の軍歌の中の兵士  
となりて  
川口 一磨

マルサン賞（互選第七位）

去りゆける息等は追うまじ売ると言う宅地権利  
書すべなく渡す  
渡辺 綾子

選者選第四位以下の作者

④ 芹沢武男 ⑤ 加藤松石 ⑥ 長田松王  
⑦ 吉永百世 ⑧ 鈴木英子 ⑨ 保田吉太郎  
⑩ 上田治史

○碑前祭 十月十四日（日）午前十一時

献酒・献花 若山旅人氏  
朗詠 大悟法利雄氏

沼津合唱団の「幾山河」他の合唱のあと、芝酒  
盛にうつり、沼津太鼓・詩吟・民踊など多彩。

# 回想

昭和五十二年十月二十六・二十七日の  
沼津朝日新聞掲載より

## 長倉さんと林さん

露木 豊

終戦後まだ間も  
ない昭和二十三年  
の秋であった。沼  
津市長だった長倉  
宜一さんが、近く  
をやるうと思うが、どう  
だろ、手伝ってくれな  
いか、と言った。

長倉さんは、汀峯の名  
を持つ牧水門下の歌人で  
パトロンのひとりでもあ  
った。貴志子夫人や旅人  
さん、大悟法利雄さんも  
快く賛成してくれたので  
準備に取りかかった。

それを牧水祭にまで広  
げて、今おこなっている  
ような碑前祭と歌会を催  
したが、初めの時は大変  
であった。金が全くなく  
市から補助金を出しても  
らおうとしたが、長倉さ  
んは、それではお手盛り  
（静岡県詩人会員）

## 牧水記念館を

露木 豊

断想 五十年たてば、  
代が移り、人が変  
わる。五十年と言  
わず、一年後を誰  
も予想することは  
出来ない。形ある  
ものは、大切に保  
存しておくべきで  
はないか。

沼津を愛し沼津に居る  
置いた若山牧水は、沼津  
で永眠した。沼津の歌が  
多くあり、沼津の人たち  
の手に、その遺墨が多  
く残っているが、今それ  
を保存する方策をたてて  
おかまいと、散逸してし  
まう心配がある。一方所  
にそれを集め、永久保存  
しておく必要があると思  
う。

沼津には、芹沢光治良  
氏の文学館と井上靖氏  
の文学館があるが、牧水記  
念館をぜひ建設したい  
（静岡県詩人会員）

露木 豊氏 市教育委員会勤務を経、沼津朝日  
新聞社編集長在職中、沼中同期生の井上靖氏より  
要請され、井上靖文学館・芹沢光治良文学館の初  
代館長となる。町田志津子氏とともに詩の同人誌  
『航程』編集。昭和五十八年二月没。

# 牧水の魅力と現代に於ける意義

藤井史昭

牧水の歌を読んだ時の、あの独特な魅力は何だろうかと思うことがあります。この場合、魅力というよりは、快感といった方がより近いかもしれません。勿論、詩の魅力をいう時、通常語られる絵画的イメージの魅力も、牧水は充分持っていますが、それだけでは言い尽くせない部分が残っています。声に出して読むかどうにかかわらず、読み進んでいく時の言葉の立ち上がり方、その展開の仕方なめらかな美しさです。蒼穹にくつきりと円弧を描く虹のように、ごつごつしたり停滞したりすることのない世界だといつてよいかもしれません。しかし何故、近代の歌人の作品の中で、牧水の作品がそのような特徴を多く持っているのだろうか、と、ずっと考えていました。その疑問は、谷 邦夫さんの『評伝 若山牧水』（短歌新聞社）を読んで氷解しました。それによると、牧水の朗詠はまことに見事で、よく徹る美声と、歌の内容と声調によって自在に変化する節まわしが、その特徴だったそうですが、私達が牧水の歌に接する時感じる快感は、それと同じ音楽的なのではない喜びではないでしょうか。牧水は、明らかに舌頭に転々させて、声調を整えているように思われます。しかし、こういう音楽的美感は、本来短歌に具わったものであり、牧水はそれを正しく歌い出しているように思われるのですが、明治以降の詩歌の世界に於ては、あまり大きな比重を与えられなくなつたように思われるのです。このことは牧水の歌の古臭さを示しているのでしょうか。私には、どうもそのように思えません。確かに、その後の詩歌の世界は、牧水の目差していたものとは方向を異にしていますが、その為失っていくものも多かつたように思われます。ここで私は牧水に関するもう一つのエピソードを、否応なしに思い出さずにはいません。牧水の若

い頃、身近で歌に関する議論が巻き起こっても、牧水はほとんどそれに参加せず、ゴロリと横になって背を向けてしまふ、というエピソードです。議論好きの多い当時の若者の中では、やはり特異な態度といわなければならぬでしょう。このエピソードは普通牧水の議論嫌い——理論に強くない——という線で受け取られがちですが、このエピソードを読んだ時、私はむしろ牧水の自信といったものを感じたことでした。歌の本質はしっかりと判っている……良い歌をつくる為には自分の調子を最高に保ちさえすればよい……舌足らずな議論に参加しても、むしろそれによって、作歌の微妙な呼吸が乱されてはどうしようもない……、こんな風に想像することが、不謹慎のそしりを免れないことは承知していますが、しかし、あなたがち無理な想像ではないようにも思われるのです。いずれにせよ、牧水の強味は、和歌の持つ生理と体質をしっかりと把握しているという自信であつたように思われるのです。今回、小社が若山牧水全集刊行を思い立った直接の理由は、小社が創立六十周年を迎える記念に、郷土に偉大な足跡を残した大詩人の業績を、もう一度正しい形で世に示したい、ということですが、仕事を進めていく過程で、それだけではすまないことに気がついたのです。牧水の歌も文章も、そして生き方も含めて、我々現代人が忘れてはならないにもかかわらず、忘れつつあることに対して、無言の教えを示しているというか、心のバランスを回復する為の教えが、和歌や紀行文等の中に、豊かに存在しているという点です。牧水全集の中に、一人でも多くの方が、豊かな果実を見つげられることを祈ってやみません。

(増進会出版社代表取締役)

# サロン音楽の夕べ

昨年一年間における  
活動の一コマ

## ヴァイオリンとチェロのための二重奏

花崎淳生・花崎 薫 6月8日(土)18:30~



## 馬場主翁ピアノコンサート

馬場主翁 8月28日(水)19:00~



## ギターソロコンサート

福田進一 12月15日(日)17:30~



## ジャズボーカル・ナイト

室伏裕子 8月8日(木)19:00~



## ファンタスティックハーモニカ

崎元 謙・松井久子 9月7日(土)18:30~



## アンサンブルコンソナツ

小林 裕・草刈麻紀・大沢昌生 2月8日(土)18:30~





## 第38回沼津牧水祭 碑前祭・芝酒盛

千本松原をこよなく愛し、松を伐採の危機から救った若山牧水ゆかりの千本浜公園内の歌碑前にて、恒例の第三十八回沼津牧水祭碑前祭・芝酒盛が、久し振りに秋晴となった十月二十日（日）賑やかに開催された。

碑前祭には、桜田光雄市長、杉田克己教育長、立木栄一市議会議長らの来賓をはじめ、東京牧水会の奈須敬二会長、田原大三事務局長や若山牧水ファンという年配の女性グループなど約六百人が参加、牧水を偲んだ。

桜田市長の「若山牧水の選んだ土地にふさわしい発展を図りたい。」という挨拶に続き、若山旅人館長による献酒・献花と在りし日の若山牧水のエピソードを交えた挨拶、さらに沼津合唱団の「幾山河……」の合唱、花柳絵さんの舞踊などが披露された。芝酒盛りでは、立木栄一議長の乾杯の音頭に続いて沼津太鼓育成保存会、沼津松波会煙火太鼓、詩吟の岳心流沼津愛吟国風会の皆様の出演にて、会は盛り上がり、用意された樽酒を酌み交わし、おでんや焼鳥、そばうどんと賞味する晴れやかな秋の一日だった。



# 第三十八回 沼津牧水祭短歌大会

恒例の牧水祭短歌大会は十月六日(日)、駿河湾を背にした沼津市常盤町自治会館に、「中部短歌」主宰の春日井建氏を招聘、約百七十名の参加者を迎えて、賑やかにかつ有意義に行われた。

歌会に先立って午前は春日井氏の「言葉の力」と題する一時間の講演があった。テーマは主として作歌現場における言葉についての意識の問題が取り上げられた。例えば、出稼ぎのため中近東から来日した若い外国人労働者の、日本語の初歩的認識を基に、我々の言葉は彼らにどう伝わっているのか、風土や生活習慣の違いは言葉とどう関わっているのかなど、日本語の持つ実際の機能や伝達力について、根元への問いかけがなされた。また、歌を作る一人の作家の生涯の上にも「詩神ヴィーナスが微笑んでいた時期とそうでない時期」のあることを指摘、老いて詩の神に見放された時の、歌詠人の覚悟にまで話題は及び、重大な課題を投げかけた。そこには終始氏の言葉についての研鑽の深さ、言葉を選び出す感性の鋭さを感じられ、歌に関わっている全聴衆を魅了した。

○牧水賞一席  
 城址の塚に映りて彩鮮し紅蜀葵黄蜀葵競ひ咲きたる  
 斎藤 俊夫

砂浜にバイクの轍のこりたり短き夏の放埒も過ぐ  
 香川 敏子

○牧水賞三席  
 夕映えの空に舞いいる鳩の群向き変るとき光体となる  
 坂部ヨシ子

互選賞  
 ○市長賞  
 齒車の時に合はざる二世帯の暮す軒場に燕また来る  
 山中さち子

○市議会議長賞  
 肩萎えて我にのみ抛る夫なれどその病む夫を我も頼みき  
 我妻よし江

○教育長賞  
 「老いては子に」と言はれるままに従いて私を次第に見失ひ行く  
 西島 はな

○商工会議所会頭賞  
 青葉透く陽の斑を踏みてキャンパスを行く若きは長き足もつ  
 新田 昌子

○観光協会協会長賞  
 さりげなく息子の形身の辞書引けば忘れな草の押し花落つる  
 塩川かをる

○沼津朝日新聞社賞  
 その枝にブランコ吊せし日もありき椎の古木を伐ると決めたなり  
 原田よしの

○マルサン書店賞  
 夜の更けて屋根うつ音にセロリーの根づく雨か

と目を閉じて聞く

米山 笑子

○互選八位

夕映えの空に舞いいる鳩の群向きを變るとき光体となる  
 坂部ヨシ子

○九位

亡き夫のくせにへこみし砥石にて夫の手なぞり鎌を研ぎをり  
 土屋さち子

○十位

化粧品行商に一生追われて粧はざりし母の柩に口紅納む  
 真島 正義





# 雑の歌会

平成4年3月7日 午後1時30分

沼津市若山牧水記念館 会議室

講師：蒔田さくら子氏



第四回雑の歌会が、講師に蒔田さくら子先生をお迎えして、若山牧水記念館で行われました。一月に募集して、歌会への出詠歌数は、七十一首。歌会当日の出席者は六十名余り。  
蒔田先生は、短歌誌「短歌人」の編集者。長年の作歌・編集作業に携わってこられた方らしく、きさくな雰囲気の中、講評は分かり易く批評は痛烈だけれども穏やかに伝わり終始和やかな会となった。  
先生の評を交えて、一部紹介させていただきます。

路地に聞く子を奪ろ子とろわが生みしむすめは居ずや花のゆふぐれ

前田 鉄江

評 今回の中で、うまい歌だなと思った。古い遊びのことばだが、残酷なことは。虚と実、現社会状況にも関連性も連想され、うまく流れている。

何事を語り居たるや春光のみなざる部屋の高砂の雛 小野 徳司  
評 心に残る歌。高砂雛は、謡曲に由来の立ち雛。ちよつと何事かを語りたいたいという意向を「高砂の雛」が効果的に使われている。

めし処のぼりの旗に描かれし鰻は西風に乗りて泳ぎぬ 渡辺たつ子  
評 目の付け所がよい。普通は何でもないところをよくみている。店先ののぼりも季節によって変化があり、折々の風情を表わして目につめてみるとよい。

姉の声間の取り方も母に似て受けし電話の余韻楽しむ 露木 歌子  
評 内容が素直で背伸びしていないのがよい。全体に少し言い過ぎかなとも思えるけれども、気取った言い方をしていないのでよい。

枯葦にまつわり残る薄氷の底ゆく水は春の音たつ 加藤寿美子  
評 想像力のはたらかせ過ぎの感があるが、きれいなうた。

白萩は雨を交へて吹く風にしなつつ花のこぼれはじめ 宮川 良子  
評 「こぼれはじめる」は文法からいうと、「こぼれはじむる」だけれど、この場合は、「こぼれはじめる」のほうが気持ち表現されているようだ。

犬猫の墓分譲の土地と云う召されし愛馬はいづくに果てしや 高橋 英子  
評 「犬猫の墓分譲」という当世に、かつての過ぎし時代とをひかくして、感慨がある。回想の歌は、現代と何かの接点のあるものをいれるのがいい。

(以上七首、蒔田先生選および互選の高点歌の一部から)

総じて、当然すぎる言葉(例・ぬくもり、はしゃぐ)にもっと工夫することや自然で心地よくありながら、選ぶことばやいいまわしは高度の作意や技巧を要していたい。日常の中の視点も大事。といった観点にて批評されていた。

「雑の歌会」は、記念館開館当初より、和室の会議室にて一流の講師を招いての会です。ますます、発表の場としてご参加下さい。



# 平成3年度事業報告

総会 5月24日(金) 19:00~20:30

理事会 第1回 5月6日(月) 17:30~19:15  
第2回 5月24日(金) 17:30~18:30  
第3回 9月3日(火) 20:30~21:30  
第4回 10月1日(火) 20:50~21:30  
第5回 11月26日(水) 18:00~19:30  
第6回 2月13日(水) 18:00~19:30

## 館報発行

第7号 3年9月1日  
第8号 4年3月31日

## 会報発行

第4号 3年6月1日

## 調査研究事業

群馬県沼田猿ヶ京 牧水文学碑 7月23日(火)~24日(水)  
岡山県邑久 長島愛生園 「明石海人展」のための調査 9月21日(土)~23日(月)  
宮崎県東郷町 牧水祭及び牧水公園 牧水銅像除幕式参列 9月17日(火)

## 沼津牧水祭 (第38回)

短歌大会 3年10月6日(日) 10:00~ 常盤町自治会館  
講師 春日井建先生 出詠342首 参加約200人  
碑前祭 3年10月20日(日) 11:00~ 千本浜公園歌碑前  
参加600人以上

## 文化行事

講演(対談) 4年1月12日(日) 13:30~ 記念館会議室  
「わが夫を語る」 大悟法静子 VS 上田治史 参加70人  
雑の歌会 4年3月7日(日) 13:30~ 記念館会議室  
講師 蒔田さくら子先生 出詠71首 参加約60人

## 中学生短歌コンクール

募集 3年9月5日(火)~9月30日(月)  
応募 438首 (6校 279人)  
展示 4年2月11日(火)~2月23日(日)  
入選短歌 40首(40人) 記念館ラウンジ

## 特別企画

大悟法利雄遺墨展 —— 柿田川讃歌に寄せて  
開催期間 3年12月17日(火)~4年1月17日(金) 記念館ラウンジ  
入場者 1,019人

## 音楽イベント 記念館ラウンジ

花崎淳生・花崎薫 ヴァイオリンとチェロのための二重奏 6月8日(土)18:30~  
室伏裕子 ジャズヴォーカルナイト 8月8日(木)19:00~  
馬場主翁 馬場主翁ピアノコンサート 8月28日(水)19:00~  
崎元譲・松井久子 ファンタスティックハーモニカ 9月7日(土)18:30~  
福田進一 ギターソロコンサート 12月15日(日)17:30~  
小林裕・草刈麻紀・大沢昌生 アンサンブル・コンソナンツ 2月8日(土)18:30~

## 社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条 この法人は、社団法人牧水会という。

第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会及び文学講座の開催
- (4) 文学に関する各種出版物の刊行
- (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 この法人の会員は、次のとおりとする。

- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の決議をもって推薦された者

第六条 会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条 この法人の入会金は、次のとおりとする。

- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
  - (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- この法人の会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
  - (2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉 林 茂樹  
 〈副理事長〉 大河原二郎 杉山光男  
 〈理事〉 上田治史 佐藤英之助 河本與司幸  
 浅井 治 保坂輝夫 田中和男 寺田桂子  
 川口和子 青木朝子 須永秀生 金子安夫  
 〈監事〉 四方一瀬 八十濱俊一

### 編集後記



私は平成四年四月一日より社団法人沼津牧水会の事務長に就任しました。長い間、沼津市立沼津高等学校に勤務しておりましたが、縁あってこれからは本会の事務的運営にあたることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。（事務長 佐野利夫）